



教童諭

上

口仁9
1053
1





序
 道ハ天下ノ人ニ治ス定規教ト人ニ
 行ハ彼定規ニ合せん為入及具家
 性ハ善ハ中ヲ交ハる所見地盤
 其端也トヤ近以思思未ト主人
 教道ノ書紙付ヨリ三ノ童童中
 予ニ序ヲ請ヒ書ト関ニ初



不仁義禮智乃四德也私解一得讀
ひ出して惡を棄め云は導き専
ら幼童乃こゝに命をす世書や
四德は腐を補ふ良薬なり凡
人良色を欲ふ溺るは仁より出づ
口福ハ義より起る花美盛るとは彼
又出づ大謀邪計ハ智より生ず皆

是四德乃腐を治す之非得の主此
まに著て其腐を治せん事を要
す依て其槩を述思思申る主
人の志入やつかふ変をるに述
それか

文政三年
辰孟秋

付丹文誌

自序

信仕と施は現に形をとりあり後年小なる人形を
あり連連に現れざる形を果せざるなり小固大果を
世に世に因りて一賢人の表漏を免て奸悪の
者時を以て裁きすといふを解は是を濫は天の自
然の幸しを罷りて澄然とて善と成り神
儒の乃ち名異なりとて金取の如き懲戒の外に
予家業餘力有りて重僕見せしめふ言を

集り詩を添画すまゝ専ら者の心をさす今
や二巻に草中とありぬ是は五半に和解を添て三卷
とす三教童諭と題し子孫とて一は或人は是を梓
小のせんを文と事に疎しを違へて其の多の
らんを機本とてせんといはれども不評は信し
て有りて機本は刻め只諸君に矢を求むを思ふ
あらはれど一知を懲戒の一助とて予が志を空
しかりざるのかんん

非得

凡例

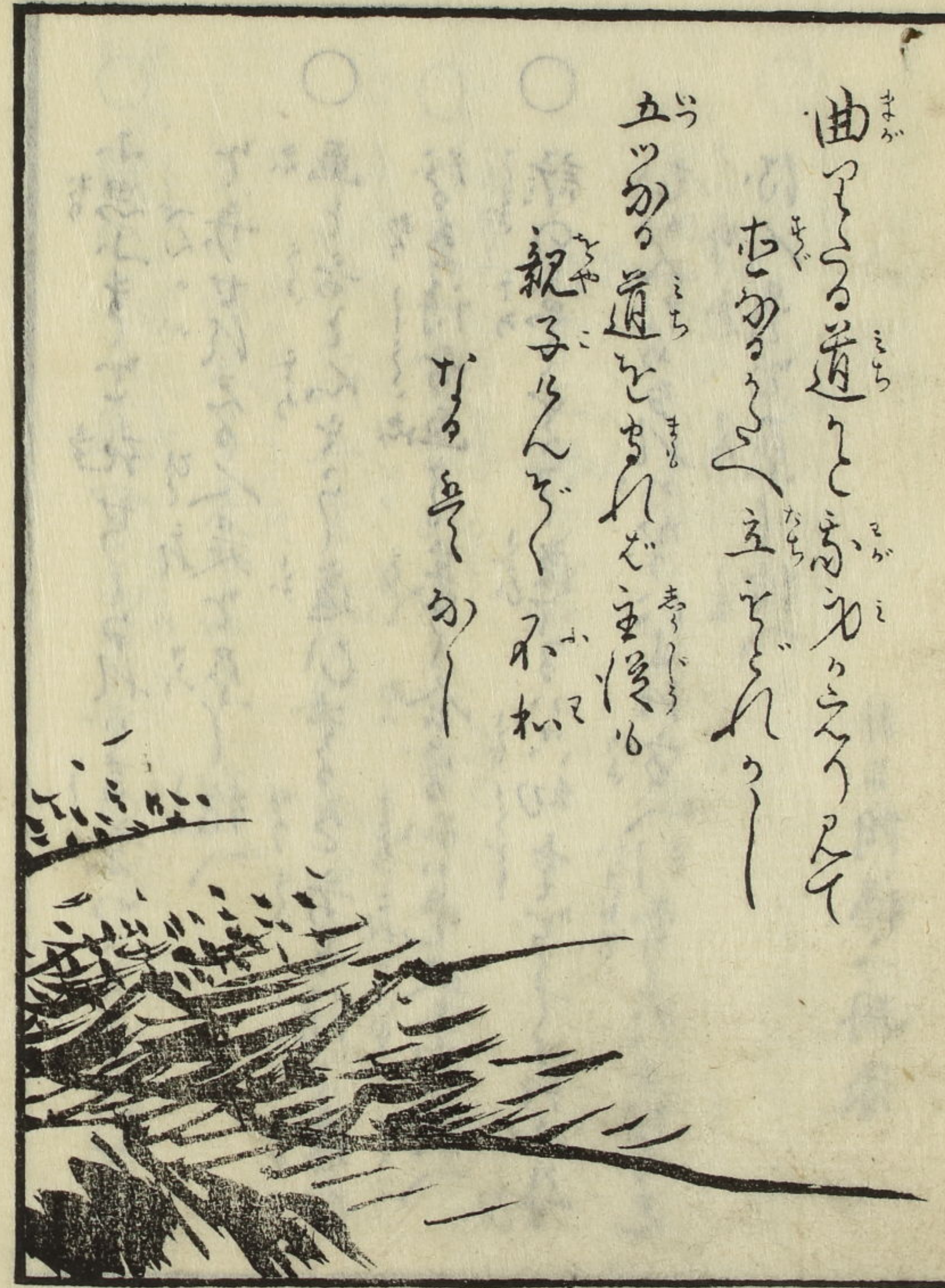
○五常の秩序は世俗の事とぞ永合せり
 天地雲泥の遠なきを教ふかゝくは還てち
 う故り三冊とぞ

○世書ハ童蒙の事とて専らとすこととぞ
 夢をばえり耳学文をばるる中遠近の事
 ん諸君子是を中へ給へ
 ○諺の意は違へる所をすめづるにのみ

小思ふも記せられ言葉つゞきに
 せよせよ人足とぞ給へ
 ○画とよとんぞ遠ひるるを詩と遠ひ
 なる詩や画もよと合ふ所は是又給へ
 ○詩の意とぞ遠ひるるに只幼童とて記ふ
 ひんたふれにかりに方へに
 人足とぞ給へ

外は附録一冊添

曲^{まが}りて道^{みち}をふりかへりて
 志^{こころ}をきくまじき人^{ひと}なり
 五^いつかに道^{みち}をたれどまじき
 親子^{ちやこ}らんぞふか
 なるか



猿田彦真像



三教童喻卷之上

思恩堂非得著

五常

仁義禮智信を五常と云ふも人なる者の
常に修ふ道也故に常れ字をつねとよむ事
と云ふはぬを云ふはるを云ふはるは
天地開けより此道なりと云ふ事
末代不易たりと云ふ事

ふわづらん人子情なる畜類あり人なるけりあるが
故に五事けりなるいふなり

仁

丈夫仁と二人あり二人お接する所より自然に
親切なるふ有親子を二人なりと云はれ二人
夫婦長少朋友皆二人あり五倫乃道五
倫ふふまどなり親切なる所を皆同じ極に仁
を美德と云ふて人れ天より受けるなり

孝
性なり又仁と人の中庸より出づる人孝天
より性を授け仁義禮智四徳を授けり
るを丹かき故に天より生れんを降と紀いふ
に是よりあるふ仁義礼智性を以てせ
ずと云ふはあしと朱子も申されり
いふ孝人乃山に登り木の根を角は取
るを見又小児を井の邊に居るを
水不溺まんを案じ孝人なるを
孝と云ふ

をかかみさおぶなやと思ぬ者なり是
 天より請はる性是より悟る者仁なり
 人よりあはれに字を仁とむなり仁者を
 克伐怨欲を去る克ハカツと云ふて何事
 人を推せてふらんまふんとするを伐を
 ホコルと云ふてさういふを克ハカツと云
 あまがふなりといひまふなりと云ふ大
 しく誇るふらつてをさういふ却て害を

後々怨いふはるさむさしきまふはる
 らむさしきまふはるさむさしきまふはる
 まふはるさむさしきまふはるさむさし
 人を恨む後々怨いふはるさむさしき
 みふはるさむさしきまふはるさむさし
 此四ツを去る仁と云ふなり仁者ハ人
 教ひんぎんはわいふはるさむさしき
 を故に恭則不敏寛則得衆といふなり

千種堂燕子花

なまあい
生醗乃忍いを

ゆるせ

それかきりし

のこりて

むふりし

ふ



楚ノ莊王臣下と集メ酒宴セ一時殿中
 燈火風よきなる時臣下入内被れくら
 まづれは后の袖を引き后夫人をさう一
 冠を縁を切り切り莊王に被りて早く火を
 とめて吟味を給ふといひ給ふや莊王入
 曰う臣下に酒をさむるを酔しめんが為あり
 酔中ふは后の袖を引き出するをけり
 酔 志免中ふをさむりて臣下の老告

縁を切り給ふとあつてこゝろ切らゝめ
 後火をさむ何事や酒をせんせり
 是仁を後乱おろして莊王をさあふ
 かり一時一人入内一命をさす
 一時いふまはさる一人の忠をさす
 後と縁を給ふは后の先年縁を切
 まし老あり其時入内仁人さ
 く初一命をさげうつてさす

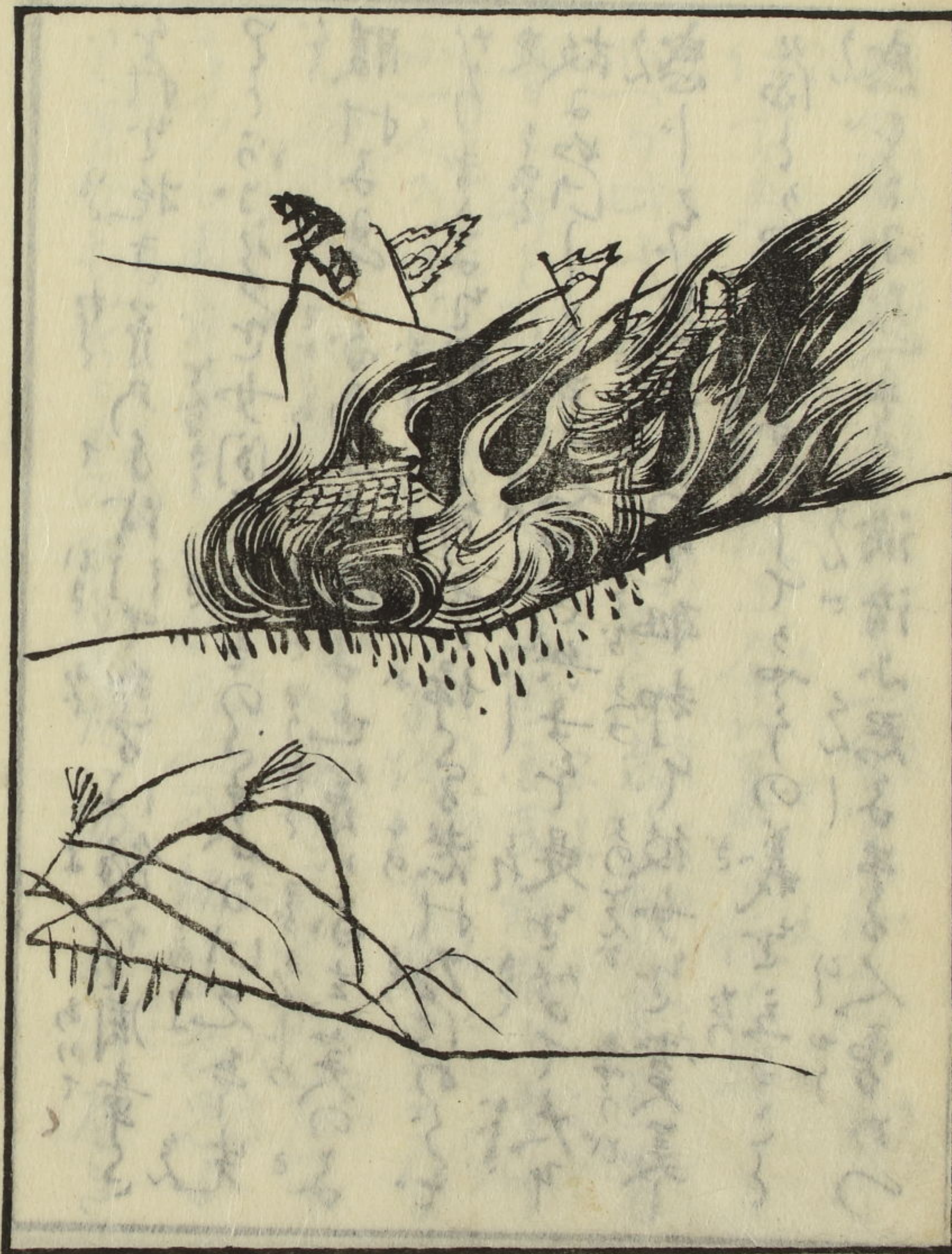
是則寛則得衆ふは是之仁
 ノ道を説時ハ云フといふ一先
 俗ノ界ニテ人ノ災難ニ逢フを
 足テハ身ヲ災ノ如ク思フて
 憐レム人ヲ恵ム情ヲ付シ
 つゝハ欲ヲ去リ人ノ爲メ慈悲愛憐
 云々云々仁云々云々

義

義ハ宜ニ義ニシテ義ニシテ
 一ニシテ義ニシテ義ニシテ
 長少君臣十義也父老を孝
 宜ニ子ハ孝ヲシテ父ノ宜ニ
 兄弟ハ兄弟ノ義ニシテ兄弟
 長少色ハ長少ノ事ヲ長少ノ
 宜ニシテ夫婦ハ夫婦ノ義ニ
 幼少ハ老ヲ敬フガ長少ノ
 義ニシテ長少ノ事ヲ長少ノ

臣ハ君ヲ敬ヒ志ヲ奉リ一命ヲ捧げ奉りて君ヲ
 侍フ君臣ノ故小命ハ義小依テ終リト
 此レ十義ハ人ノ事ハ常ノ道也昔
 魯と齊と戦フて魯國破シ玉氏離散シ中
 小一人ノ婦兒ヲ抱キ弟ヲ失フて赴キ
 齊ノ兵小引渡スル兵も是を以て去ル
 是レ周章ナル事ハ人ノ親ヲ老兄ノ
 兄弟ハ抱キ弟ヲ失フて赴キ
 是レ周章ナル事ハ人ノ親ヲ老兄ノ

臣ハ君ヲ敬ヒ志ヲ奉リ一命ヲ捧げ奉りて君ヲ
 侍フ君臣ノ故小命ハ義小依テ終リト
 此レ十義ハ人ノ事ハ常ノ道也昔
 魯と齊と戦フて魯國破シ玉氏離散シ中
 小一人ノ婦兒ヲ抱キ弟ヲ失フて赴キ
 齊ノ兵小引渡スル兵も是を以て去ル
 是レ周章ナル事ハ人ノ親ヲ老兄ノ
 兄弟ハ抱キ弟ヲ失フて赴キ
 是レ周章ナル事ハ人ノ親ヲ老兄ノ



子子ばせ

あなう

かーこ

や

ふがふ

で

し

あ

子神

子子



て義あり時を乱るる小人有り義あり
 時を亂るる者亦不義なり富貴なる
 るは富貴なるが如く是も亦不義なる
 故に皆天命之其を常と爲さざる不義なる富
 貴を求むるも天を以て是を以て人なりと恐
 りて懐い外義の變に聖賢の多し悦ばざる
 不學の者と説き及ぶ先略て云時ハ
 吾惡しは行を破る如く志を以てしる

惡を去り吾を以て義也

禮

禮は美なる利は汚るそれし小致いとう路
 ざるを云天を以て比し低き差別あるまは
 人にも下れ差別ありては叶ぬへぬ事
 是れく位と云ふ有禮義三百威義三
 千と云ふ大なる禮は三百少くも威儀立居
 方まは禮が三ありと周公且る曰り禮と云

若其礼多し禮記を品ありて有り今
 こふ畧を禮と云根元は教ふを人とし立
 己成後より道を歩みふを人とする位に云ふは
 むべ人を先きか禮也中に連う相法うなど
 小をあはるる者さう玉かす礼の礼ふりて
 何変り人は禮さか禮ありて礼ふりて礼ふりて
 禮の礼ふりて礼ふりて礼ふりて礼ふりて
 入君境目の田地を争ひ終は決せず周の文王

へ聖人あまは文王は批判してふりてふりて
 國の君がつれ立周れ玉（礼）ふりてふりて
 農夫が田中より何人し礼を争ふて
 立よりて是を礼に礼田の畔を争ふて
 は一人の礼を礼に礼田の畔を争ふて
 互ふ禮を争ふて雨を君聞て大に恥辱人
 文王の治め礼ふりて百姓を礼に礼に
 を知ふふりて一國の王より礼を争ふて



有^あまき^き変^へま^まい^いに^に礼^れう^うし^し文^{ぶん}王^{わう}れ^れ能^{のう}は^は出^でて決^{けつ}
 するに^に不^ふ交^{かう}是^こう^うゆ^ゆん^んと^と互^{あひ}に^に恥^ちて^てゆ^ゆる^るを^をま^まよ^よ
 り^り争^{そう}い^いを^を止^とめ^め今^{いま}の^の世^よま^まで^でも^も文^{ぶん}王^{わう}の^の氏^し時^{とき}を^を
 讓^{やう}る^ると^と云^いは^はふ^ふ是^これ^れは^は文^{ぶん}王^{わう}の^の禮^れ德^{とく}氏^し百^{ひゃく}姓^{せい}
 と^とに^に玉^{ぎよく}を^を使^{つか}ふ^ふは^は禮^れ法^{はふ}を^を正^{ただ}し^しき^きふ^ふ
 時^{とき}に^に礼^れを^を又^{また}思^{おも}ふ^ふを^を以^{もつ}て^て礼^れを^を習^{しゆ}ふ^ふ時^{とき}に^に
 乱^{らん}る^る時^{とき}も^も亡^なし^し禮^れを^をえ^える^るを^を人^{ひと}道^{どう}と^とす^す
 乃^{すなは}ち^ち仁^に義^ぎ神^{しん}佛^{ふつ}も^も禮^れを^をわ^わら^らせ^せる^るを^を不^ふ可^か

故^{ゆゑ}に^に孔^{こう}子^しに^に禮^れ小^{せう}わ^わら^らせ^せる^るを^を言^いふ^ふを^を是^この^の國^{こく}を^を變^へ
 じ^じと^と視^した^たり^り是^この^の動^{どう}事^じと^とあ^あら^らせ^せる^るを^をし^しめ^めら^らる^る
 禮^れを^を乃^{すなは}ち^ちを^を礼^れの^の行^{ぎやう}要^{よう}と^と爲^なす^す

智

智^ちと^と云^いふ^ふは^は不^ふ交^{かう}を^をし^して^て無^むに^に恥^ちて^て云^いふ^ふを^を其^その^の
 利^りを^をし^して^て云^いふ^ふを^を智^ちと^とい^いふ^ふ故^{ゆゑ}に^に智^ちと^と云^いふ^ふを^を知^ちる^る
 曰^{いは}く^く是^この^の智^ちは^は目^めを^をさ^さる^るを^を知^ちる^るか^から^らず^ず早^{はや}く^く知^ちる^るを^を
 惡^{あく}と^とい^いふ^ふ早^{はや}く^く知^ちる^るを^を早^{はや}く^く知^ちる^るを^を利^りと^とい^いふ^ふ

慈母冥ミツトミツ水ミヅはりて川カハより土ツチは
 ちりて終ハツふ山ヤマの其廣大ミタカヒロシなる及およてい
 水ミヅの浪なみを起おこし木キをうるうるる其その中うちに魚イサを
 生なじ山ヤマを木キをきくく廣大ミタカヒロシなるるてい雲クモ
 雲クモを起おこしく生なじ人ヒトの智チをしるる命イデ如ごとく
 仁義ニギギ禮レイけを起おこしく聖賢セイケンの書ショをしるるて
 吾われ乃すなはち終ハツふ時ときをしるるてく中うちに
 自然シゼンの智チをしるるて山ヤマを木キをきくく川カハを魚イサ

龍リウをしるるて山ヤマを木キをきくく川カハを魚イサ
 のをしるるて智チのちなるる事ことは中うちに
 残のこしく老ラウをしるるて同ドウ心シンにしるるて老ラウをしるるて亦また
 能よくしるるて智チのちなるる事ことは中うちに
 有あるる人ヒトの智チをしるるて同ドウ心シンにしるるて老ラウをしるるて亦また
 して終ハツふ山ヤマの其その中うちに魚イサを
 生なじ山ヤマを木キをきくく廣大ミタカヒロシなるるてい雲クモ
 雲クモを起おこしく生なじ人ヒトの智チをしるる命イデ如ごとく
 仁義ニギギ禮レイけを起おこしく聖賢セイケンの書ショをしるるて
 吾われ乃すなはち終ハツふ時ときをしるるてく中うちに
 自然シゼンの智チをしるるて山ヤマを木キをきくく川カハを魚イサ

千種堂

燕子花



あゝぬ

き

め

い

き

き



き

根

き

き

不恥下問をくぢうがふとてふる下きの老おいは
 相を同あひを恥はせずはつるふ同ふが
 禮らい之の聖人せいじんを魯ろの宗廟そうびやうを預あづかられる
 時とき廟中びやうちうでそふるををく同ふい
 終しまふと聖人せいじんあまはす終しまる終しまは
 ト終しまてられむは同ふ終しまふは是これ先せん
 第一だいいちと禮らい之の同ふをけ方かたの智ちへとる人ひと
 ハ智ちつる國くにを治と先せんりる人ひとを家いへを治と

仁義にぎ被ひる道みちをもあふと終しま
 らされむ道みちは智ちむむ時ときハ家いへをくし
 ちいふとさう一ひと人ひとはよくつるあ
 かり世よ外がい智ちの義ぎ多おほしとるはとる得え
 了しやう先せんたを智ちと云いふ也なり

信

信しんと云いふ人ひと入いれるをいふは神かみがあつてを
 叶かなふあり依よ而して信しんといふ字じハ人ひと篇へんニ言いふ

三教圖

三教圖

成^{なり}さ^さる^るが^が故^{ゆゑ}に^に水^{みづ}生^いむ^むを^を悟^{さと}入^いる^るま^まに
 子^こを^を女^めと^とす^すべ^べ水^{みづ}出^いで^では^はた^た有^ある^るま^まに
 信^{しん}じ^じを^を年^{とし}ふ^ふに^に義^ぎを^を禮^{れい}も^も智^ちも^もつ^つか^から^らう
 誠^{まこと}は^は愚^{おろそ}か^かと^と思^いふ^ふ一^{いっ}世^せに^には^は尾^お生^いむ^むを^を思^いふ^ふ
 子^こを^を知^しる^る人^{ひと}は^はれ^れど^ど多^い時^{とき}に^に人^{ひと}は^は尾^お生^いむ^むを^を
 お^おろ^ろし^し人^{ひと}は^は有^ある^る喻^いえ^えい^いと^と若^{わか}き^き女^め父^{ちち}母^{はは}の^の
 目^めを^を赤^{あか}い^い男^{おとこ}と^と誤^{まち}ら^らは^はひ^ひは^はち^ちう^うい^い死^しを^を共^{とも}
 り^りせ^せん^んと^と約^{やく}し^し欠^か女^め兩^{りやう}婦^ふ小^こま^ま人^{ひと}と^と信^{しん}を^を

守り約を遠くを男と共に死す是等生
 うそ極甚し己任を重り操立しと思ふ
 そ惡く身并愛膚を父母は請け大切か
 る此を自疵付父母をかきとるう足す
 孝道を失ふ不孝けとやわづらわらふ
 ばうの親類の面を汚し天然の姿を
 ちぐめ此業の死をよげ惡名を累代に残す
 法まゝとを何とを事とてう是より足す



うすか
夢文やれ

そのふかぢ

はまりるる

おろろ

恋う
川

千種堂燕子花



時^{とき}を^ひ生^たま^へる^まは^まり^り信^{しん}を^{まも}る^るて^はふ^べ
 水^{みづ}は^おも^いき^死する^る人^{ひと}死^しを^おも^いん^でを^たの^り
 ず^の思^{おも}ひ^考ふ^所外^{ほか}は^あま^り変^へる^事生^なま^い
 て^死生^{しやう}を^おも^いる^事多^くし^考え^る
 う^おも^いて^信ま^へる^事乃^なを^おも^いる^事
 能^よう^なは^るか^つの^遠い^はる^所に^必ず^し
 を^用ふ^事

三教童喻上終



